



Title	『すばらしい新世界』の二つの社会について
Author(s)	三浦, 良邦
Citation	Osaka Literary Review. 1974, 13, p. 99-107
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25753
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『すばらしい新世界』の 二つの社会について

三 浦 良 邦

『すばらしい新世界』は未来の機械文明・科学文明社会とそこでの人間を描いたものであるが、ハックスリーはこの作品で二つの対照的な社会を読者に提示している。一つは標題でもある「すばらしい新世界」と考えられる文明社会であり、もう一つはそれに抵抗する野蛮人・ジョンの世界である。この小論では、この二つの社会の内容およびハックスリーのそれに對する考え方を見てみたい。

I

『すばらしい新世界』は未来の想像上のフォード紀元632年の物語である。フォード紀元元年は1908年で、これはT型自動車を発明しその大衆化に成功したヘンリー・フォードにちなんで名付けられた紀元である。新世界では地球上の社会は一つの世界国家を形成しており、世界国家のモットーは「共有・均等・安定」である。これを実現する為に科学・心理学等を應用して国民の徹底した管理・統制が行われている。まず社会はピラミッド型の階級的社會であり、国民は各人の社会的機能によってアルファ・ベータ・ガンマ・デルタ・エプシロンの階級に分類されている。彼らはすべて母の胎内から自然に生まれるのではなく、試験管の中で人工的に受精・孵化されて生まれてくる。大量生産の原則が生物学に應用され、同じ顔・性質を持つ何十という双生児が、車の生産のように人工孵化所で計画通りの数で生産される。これはボカノフスキイ法と呼ばれ、1卵から1胎児

『すばらしい新世界』の二つの社会について

ではなく、分裂させて何十もの均等な双生児が作り出される。それ故、地球上の20億の住民はたった1万の名しか持っていない。

次に、人間はすべて誕生以前に属する階級が決定され、成人した時自己の社会的地位に満足するように、試験管中の胎児の段階で様々な生物学的科学的方法で条件反射を植えつけられる。例えば熱帯に住む熱帯労働者は暑さを愛し、寒さを恐れるように、飛行機操縦者は逆立ちしている時が一番幸福だと感じるよう条件づけられる。そしてまた、以上のようにして生産された幼児は新パヴロフ式条件反射という訓練によって、永久不変的に条件反射を植えつけられる。絵本と花と猛烈な音と電気ショックとを関連づけることにより、幼児は書物や植物に対して本能的憎悪を植えつけられる。また理屈ぬきの言葉による睡眠時教育によって性教育や、自身の階級を最上と思うように階級教育が施される。

I'm so glad I'm a Beta....Alpha children wear grey. They work much harder than we do, because they're so frightfully clever. I'm really awfully glad I'm a Beta, because I don't work so hard. And then we are much better than the ⁽¹⁾Gammas and Deltas. Gammas are stupid.

この睡眠時教育法は、新世界に於いて最も偉大な德育的・社会的教化法である。理屈ぬきの言葉を何千・何万回と反復することにより、一つの真理が完成し、人間の生涯を通じての判断し、望み、決定する心が出来上がる所以である。

これらはすべて国民の幸福・国家の安定の為になされている。上述のような方法で条件反射を植えつけられた子供は、成人後も同じ精神構造を維持し、喜んで各人の義務を果し、逃れられない運命を甘受し、国家の望む通りに生活し、絶対に国家に反逆しないのである。

'And that,' put in the Director sententiously, 'that is the secret of happiness and virtue—liking what you've *got* to do. All conditioning aims at that: making people like their unescapable social destiny.'

また、新世界にはソーマという飲物がある。これはアルコールとキリスト

ト教の長所を混合したもので、全然不愉快な反作用はなく、宗教的陶酔をもたらし、幸福感や愉快な幻覚症状を与え、現実から人間を逃避させるものである。もし何か不愉快な出来事が起れば、人間はソーマを飲む習慣になっている。その他に新世界の社会制度として色々な事柄が禁止されている。社会の安定を維持するには個人の安定、個人の感情の安定が必要だとして、親子・夫婦・恋人等の人間関係はみだらなこととして廃止されている。人間間に於ける愛情は皆無であり、誰もただ1人の人間を独占することは出来ないのである。また、孤独な時間を持つことや Shakespeare 等の古書の読書は不健全として禁止されており、宗教も自然愛も禁止されている。これらの代りに、人々を退屈させない為に様々な機械仕掛けの娯楽遊戯があり、乱交が許可され性的自由が公認されている。

かなり長くなつたが、以上が新世界の概観である。ではハックスリーはこのような社会をどのように考えていたのだろうか。その前にもう少し新世界を西欧駐在総統、ムスタファ・モンドの言葉を参考に分析してみたい。新世界の究極の目的は人間の幸福と安定である。事実国民のすべてが幸福に暮らしている。戦争・病気・老齢・欲望・個人的葛藤等諸々の社会的・肉体的・精神的苦悩が克服されており、死の恐怖さえない。人々は毎日を幸福に永遠に若々しく暮らし、60才になって急に衰え死亡するのである。このような面のみを考えれば、新世界は多くの人間が人類の未来社会として希望を抱いてきた社会である。しかしながら、このような幸福の獲得には高価な犠牲が支払われている。人間の幸福を疎外するものとして、知識・芸術・宗教・純粹科学・真実・美・愛等はすべて抹殺され、自由意志は禁止されているのである。従って克己・貞潔・高邁・忍耐等の人間的価値や神は不必要で存在しないのである。“God isn't compatible with machinery and scientific medicine and universal happiness.”⁽³⁾つまり新世界人は幸福になる為に人間でなくなっているのである。新世界は科学によって厳密に条件づけられたアリの社会のような有機的・合理的な全体主義国家であり、その中で各個人は、安定し幸福ではあるが、運命づけられた社会的機能を単に機械的に実行しているだけである。人間は機械化さ

『すばらしい新世界』の二つの社会について

れ、科学に隸属し、人間としての動物的・精神的・考える側面が完全に犠牲にされている。人間はロボットと同じで精神は死滅し、肉体のみが勝手に動いているのである。

In *Brave New World* the imprisonment of the human spirit by science is almost complete; human values have totally disappeared, natural impulses allowed to atrophy until the inhabitants react like automata.⁽⁴⁾

これが「すばらしい新世界」の実態であるが、果してハックスリーはこの新世界を「すばらしい」と考え肯定したのであろうか。彼は作品の表題の裏に次のようなN・ペルジャーエフの一節をかけている。

Les utopies apparaissent comme bien plus réalisables qu'on ne le croyait autrefois. Et nous nous trouvons actuellement devant une question bien autrement angoissante : Comment éviter leur réalisation définitive ?
... Les utopies sont réalisables. La vie marche vers les utopies. Et peut-être un siècle nouveau commence-t-il, un siècle où les intellectuels et la classe cultivée rêveront aux moyens d'éviter les utopies et de retourner à une société non utopique, moins 'parfaite' et plus ilbrie.⁽⁵⁾

これがハックスリーの考え方であろうと考えられる。ユートピアは実現可能であるが、この社会は個性が無視され人間性が抹殺された社会である。人間固有の価値である自由がなく、人間の精神的価値が消滅した社会である。ハックスリーは人類に幸福か自由かの二者択一を迫っているのであり、科学的唯物主義社会を‘an insane life’⁽⁶⁾として否定しているのである。

II

新世界での生活に抵抗する人物が三人いる。新世界人のヘルムホルツ・ワトソンとバーナード・マルクスそして野蛮人のジョンである。ヘルムホ

ルツは何事においても有能すぎる人間で、その為周囲の人間と自分自身との間に差異を感じ、社会で孤立している人間である。そして心の奥底では常に何か他に言うべき大事なことがあると考えており、反社会的な創作活動である「孤独」という詩を作り発表する。バーナードはアルファ階級だが標準より背丈が低く、その肉体的欠陥により常に他人の軽蔑と敵意を感じ、慢性的な劣等感に悩み、仲間から孤立している人間である。そして、自意識が銳敏になり、憎しみ、悲しみ等自然な人間の感情を一部持っている。この二人に共通するのは自意識過剰で、個人としての自覚を所有しているということである。前者は優秀である為に、後者は劣っている為にそれぞれ社会で孤立し、反社会的行動をする。しかしながら、二人共新世界で余りにも条件づけられている為、社会への深刻な脅威とはならなく、最後には島送りにされる。作者は二人を新世界に抵抗する人物としてではなく新世界の全体主義をより鮮明にする為に登場させていると考えられる。

進歩に抵抗する真の人間らしい人間はジョンである。彼は中央ロンドン人工孵化・条件反射育成所長とリンダの子供であり、彼女が所長と野蛮人保護地区に見物に来ていて、偶然置き去りにされ、そこで生んだ子供である。この野蛮人保護地区は不順な天候と天然資源の不足の為、新世界として文明化する価値がなく、以前の人間の社会的形態が残っている地域である。ここでは約6万のインディアンと混血児が結婚をし、家族を養い、過去の宗教的伝統を維持しており、迷信・病気・老齢・死・男女感の葛藤・所有欲等が依然として残存している。ジョンはこの保護地区で野蛮人として養育されたのであるが、両親が新世人であり、またリンダの習慣化された行動がインディアン社会では反社会的で受け入れられなかつたので、彼は疎外された存在であり、孤独であった。また彼は文字を教えられ、Shakespeare全集を読み、母が語る新世界の様子を聞いて育った。彼は野蛮人として自然な人間の感情・精神を所有する強い個性の持主に育つたのである。彼は旅行に来たバーナードによって発見され、新世界へ連れて来られる。新世界では彼は色々な所を見物し、様々な経験をし次第に文明社

『すばらしい新世界』の二つの社会について

会に嫌悪を感じ、新世界に抵抗・反逆する。彼は新世界人のレーニナを崇拜し熱愛するが、二人の性に対する考え方の相違により、彼女を拒絶する。また公園街死病病院で母リンダが死ぬ。彼は幼なかった日々の出来事を思い出し、恐怖と悲しみで気が狂いそうになる。隣りでは子供達が死に對して恐怖を感じないように条件づけられているので、母の死には無関心でやかましく遊んでいる。ジョンはこれをみて、母の死を無駄にしない為にも、新世界人を自由にさせよう、自由な人間にさせようと決心してソーマ入りの箱を窓から投げ捨てる。しかし彼の気持ちは理解されなく、怒った人々と乱闘になる。彼の精神・行動は文明社会では受け入れられないものである。この乱闘が原因で彼は總統と文明社会の功罪について議論する。新世界はすべてのものを犠牲にして人間の幸福を追求しているのだという總統の言葉に反発して、自分の肉体を苦行浄化し、神を崇拜するジョンは、幸福と満足を人間の目的と考えないで、自然な人間生活を主張し、不幸になる権利を要求する。

'But I don't want comfort. I want God, I want poetry, I want real danger,
I want freedom, I want goodness, I want sin....I'm claiming the right to be
unhappy.'⁽⁷⁾

そして彼は孤立した燈台に逃げこみ、孤独を求め、原始の生活に戻る。しかし彼はそこで自身が幸福なのに気づき、むち打ちという自虐を求め、自殺する。彼は happiness か misery かの二者択一を迫られ狂氣じみて misery を追求し自殺するのである。

以上が新世界でのジョンの行動であるが、野蛮人・ジョンの世界、彼の生き方とはどのようなものであろうか。新世界は人間性を犠牲にして、幸福だけを追求した。しかしジョンは、野蛮人保護地区で育ったので様々な人間の不幸な状態を背負い、新世界が苦悩として克服した諸々の苦悩を生として受けとめ、引用(7)で述べているように自然な人間として生きようとする。彼は Shakespeare を好み、母を愛し、ロマンティックで神を信じている。彼は苦悩し、喜び、人を愛し、汗水流して労働することを望み、

神・善・美・罪を望み、不幸になる権利、悲劇的な死さえも望むのである。彼は幸福を求めないので、精神的価値を求め、完全なる生命の燃焼を求めるのである。結局野蛮人の社会は真実・美を大事にし、人間性を重んじる社会である。しかしこの社会は人間の諸々の苦悩が存在し、必ずしも人間が幸福であるとは限らない社会である。

この野蛮人・ジョンの生き方は、ハックスリーが『何をしようと』で考えた「生の讃美者」の生き方であると考えられる。彼はこの評論で、人生は多様であり、その矛盾した多様なる人生をそのままに、全面的真実を生きるのが人間の理想であると主張した。

In a word, he will accept each of his selves, as it appears in his consciousness, as his momentarily true self. Each and all he will accept—even the bad, even the mean and suffering, even the death-worshipping and naturally Christian souls.
He will accept, he will live the life of each, excessively.⁽⁸⁾

上記の引用と野蛮人の考え方・生き方を比較する時、その類似性は明らかであると考えられる。彼は単一を主張する統一に挑戦して多様の生を生きようとする。しかし野蛮人は自殺するのである。これは勿論ハックスリーのすばらしい新世界への諷刺もあるだろうが、彼がこれまで人生観の基盤とした「生の讃美者」の哲学に限界を感じていたのではないだろうか。

The failure of the Savage to find a real alternative suggests, in spite of the many echoes of 'life worship', that Huxley was moving away from the doctrine of *Do what you Will.*⁽⁹⁾

ハックスリーは前作『恋愛対位法』で「生の讃美者」の考えをもとに、人間の理想的な生き方は人間の動物的機能と理性的機能、肉体と精神の均整のとれた生活であり、自然な人間として全人格的に生きることであるとした。しかし、このような生活は複雑な現代社会では不可能だと彼は悟ったのではないか。⁽¹⁰⁾

III

ハックスリーは『すばらしい新世界』では現代社会を注視し、理想的な人間の生き方・人間社会を考えながら、すでに I・IIでみてきたように何も解決法を提示していないように思われる。彼は現代社会が志向している人間個人の価値を無視する科学文明を批判し、進歩への盲目的崇拜、快樂主義の危険性を強調し、諷刺している。しかしその一方では人間的価値を有する生き方を提供できないでいる。つまり作品はハックスリー自身のジレンマ、内部矛盾の表現だけにとどまっているのである。彼は1932年では新世界と野蛮人というどちらも不完全な社会・生き方しか考えられなかったのであり、真実・美・幸福が総合された社会を切望しながら、それが可能だとは考えなかったのである。後に彼は神秘主義に共鳴し、『永世哲学』を発表した1946年には第三の道を提唱している。

If I were now to rewrite the book, I would offer the Savage a third alternative. Between the utopian and the primitive horns of his dilemma would lie the possibility of sanity—a possibility already actualized, to some extent, in a community of exiles and refugees from the Brave New World, living within the borders of the Reservation.⁽¹¹⁾

ここで述べられている ‘a community of exiles and refugees’ は何かの理由で新世界での共同体生活に適合するには自意識的な個人主義に陥り、公認の思想に飽き足らず、自分勝手な思想を持つ人間のいくところである。ここでは科学は人間の為に使われ、宗教は東洋的神秘主義である。結局、ハックスリーは H・G・ウェルズのように人間の未来を楽観することはできなかったのであり、またロレンスの影響を受けて考えた「生の讃美者」の人生態度にも納得できなかったのである。この後、彼は東洋的神秘主義に向かう。

Sadly enough, the author could find no earthly solution. Rejecting this world entirely in bitterness and disgust, Huxley adopted the philosophy of nonattachment, a mystical belief of Buddhist origins, which leads man away from the

ugliness of bodily existence and immerses him in eternal, changeless verities.⁽¹²⁾

注

- (1) *Brave New World* (London, 1967), p.21.
- (2) Ibid., p.12.
- (3) Ibid., p.192.
- (4) *Aldous Huxley:a Study of the Major Novels*, ed. Peter Bowering (London, 1968), p.104.
- (5) *Brave New World*, p.v.
- (6) Ibid., p.vii.
- (7) Ibid., p.197.
- (8) *Do What You Will* (London, 1956), pp.282—283.
- (9) *Aldous Huxley : a Study of the Major Novels*, p.106.
- (10) *Beyond the Mexique Bay* (London, 1949), pp.314—315.
- (11) *Brave New World*, pp.viii—ix.
- (12) *Three Modern Satirists : Waugh, Orwell, And Huxley*, ed. Stephen J. Greenblatt (London, 1965) p.101.